

貯れば皮種などは底に沈みて、上は清き水になれるを用る也。いく年ふとも氣味損することなし、其功能妙なり、また海膽の醬を傳るもよし。

〔松屋筆記八十六〕焦爛治方

同○簷曝六卷丁才人被火燒皮肉焦爛出蟲如蛆者用杏仁爲末敷之卽愈。

〔拾芥抄下未治鼠咬方〕同方應急靈妙藥方云、

〔耳囊五〕鼠恩死の事附鼠毒妙藥の事

西郷市左衛門といへる人の母儀、鼠を飼ひて寵愛せしが、如何しけるや、彼鼠右母儀の指に喰付しが、殊の外痛みはれければ、市左衛門立寄て憎き事かな、畜類なれば逃失ぬ、其夜母儀の夢にかの鼠來りて、右指へ白躑躅の花の干たるを付れば、立所に鼠毒を去て、愈るよしを述べ、右白つ、じの花を枕元におくと見て夢覺ぬ、驚きさめて枕元を見れば、有し鼠は死て、白つ、じの花をくわへ居ける故、右の花を指の痛に附しに、立所に腫もひきて、快くなりしとなり。

〔雲錦隨筆四〕蜈蚣のさしたるには、活蟻を摺つければ、痛み直ちに治す、又酒を熱く煎て疵をあらへば、忽ち熱氣さりて痛みを止む。

〔本朝醫考中〕外科

本朝自古尙武、故戰場以先登爲士林之勤、依之每戰蒙創者多矣、故瘍醫雖兼治金瘡、又在士林專攻其術者巨多、號曰金瘡醫、吉益流中條流之類是也、以其術推廣之、兼治婦人產前產後之疾病、

〔通俗編二十一〕金瘡醫 龍韜王翼篇、方士三人、主百藥以治金瘡、晉書劉曜載記、使金瘡醫李永

療之、按今謂之外科、

〔伊呂波字類抄幾體〕瘡キズ、亦作創、爲刀所傷云、金瘡、瘕病、瘡疽、瘡也、傷、瘡、疾、瘍、瘍已